

佳作

平和への道のり

熊本県熊本市立託麻中学校一年 北野 未桜

私は、鹿児島県にある知覧特攻平和会館へ行ききました。そこで私は、悲惨な光景を目にしました。

足を踏み入れ、最初に目に映ったものが、「隼」はやぶさでした。この戦闘機に一人乗り、敵の船などに体当たりするという何とも酷い作戦を実行していたのです。

その戦闘機に乗り、戦いに行く人たちのことを特攻隊員といいます。中でも、隼に乗る隊員は「少年飛行兵」というまだ若い人々ばかりです。少年飛行兵になるには中学二年生で学校に入り、毎日厳しい訓練を受けないといけません。そうした人々は約三百三十五名おられます。

少し進むと、そこには何百枚という特攻隊員の写真が壁一面に貼られていました。写真の下には、その方の年齢と役割が書いてありました。どなたも二十歳前後で一番年下は、わずか十七歳という若さ

でした。

そんな彼らは出発するまでを、三角兵舎で過ごしました。その中は窓がなく、薄暗い場所でした。出発の前日、彼らは遺書を残しながら泣いていたそうです。

しかし、彼らを支えてくれる人がいました。知覧実科高等女学校の生徒さんたちでした。おもに掃除や炊事をして、最後の日まで彼らと共に生きた人たちです。出撃の日は、泣かずに、笑って見送ってあげようと決めていたそうです。

私は彼女たちを尊敬します。きっと戦闘機が見えなくなるまで、笑顔で泣きそうになりながら手をふったのだらう、と思うと女性の強さを感じました。毎日のように散りに行く少年たちを彼女たちが勇気づけたのだと思いました。

少年飛行兵たちの残した遺書はガラスケースの中でちゃんと生きていました。力強く決心した字や震えた細い字から彼らの性格を一人一人知ることができました。語り部さんが紹介された遺書は十八歳の少年が義理の母に送ったものでした。そこには

「いつくしみ育て下されし母。ありがたい母。とお母さ
とい母。今こそ大声で呼ばせて頂きます。お母さ

ん。お母さん。お母さん。と。」

これを書いた彼は、義理の母を受け入れきれなかったそうです。だから最後に「お母さん」と言ったのです。彼の他にもたくさんの方々が家族や恋人への感謝と別れを書き残していました。

彼らは自分の命をかけて、日本の未来のために散っていったのです。

ボロボロになった戦闘機、少年飛行兵の人たちの写真や手紙を見て、涙ぐんでしまいました。語り部さんも何度もお話されているのに涙を流されています。この話を聞くまで平和の尊さを知らずに生きてきたのかと思うと、とても情けないです。日本のために散った彼らをもっとたたえなければなりません。今の幸せは彼らのおかげだとしみじみ感じました。今、彼らに「ありがとう」と言いたいです。